

資料・研究ノート

閉ざされた言語

——サミン運動とその言語哲学——

福島 真人*

The Closed Language

——The Samin Movement and Its Philosophy of Language——

Masato FUKUSHIMA*

The main objective of this paper is to analyse the logico-linguistic aspect of the religion of Adam in Java, which is usually called Saminism and known as an indigenous peasant movement against the Dutch colonial government.

Most studies of this movement have tended to neglect its symbolic (including linguistic) peculiarity, owing to a lack of first-hand research on that topic. The field research done by the author in the Samin communities, which still exist around the Pati regency, reveals that their apparently bewildering usage of language, which has been believed to be merely a way to upset outsiders,

is indeed based on a consistent philosophical world-view about the relationship between language and the nature of man, which they symbolize by the phrase '*Adam kuwi ucap*' (Adam is utterance).

By using arbitrary folk-etymology and special terminology, they construct a peculiarly closed linguistic sphere where every outer element that does not fit their belief is forcibly re-interpreted and reconstructed so as to harmonize with their Weltanschauung. Thus they build up their own linguistic world around the notion of centrality of man in this universe.

はじめに

19世紀後半から20世紀前半のオランダ領東インド史（特にジャワ史）を繙けば、史上初の民族主義運動と一般に認められているブディ・ウトモ（Budi Utomo）やイスラム同盟

（Sarekat Islam）といった諸運動の前段階として、中部ジャワ農民による自主的な反乱運動としばしば定義される、サミン運動¹⁾と呼ばれる現象についての解説がみられる。このサミン運動というのは、Blora 県南部の

* 東京大学大学院社会学研究科文化人類学専門課程；Department of Anthropology, The University of Tokyo, 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113, Japan

1) 研究者や一般のジャワ人も、オランダ人の命名に従って、サミン主義者（Saminist）あるいはサミンの民（wong Samin）と呼ぶが、彼ら自身は自らをアダム教徒（wong agama Adam）またはシクップの民（wong sikep）と呼ぶ。以下の文では、これらをみな同義として扱う。

Randublatung 郡 Plosorejo 村 Kediren 区という村に1859年ごろ生まれた Surontiko Samin と称する一農民によって始められた運動で、急速に拡大して、各地で東インド政庁に対する抵抗、と一般的に解釈されている一連の行為、例えば納税・賦役義務の拒否、役人に対する挑発的態度などを展開するようになった。

この運動は、1907年、拡大を恐れた東インド政庁による、主要リーダーの逮捕、流刑にもかかわらず、その勢力は Blora 周辺の諸県にまで及び、納税・労役義務の拒否や、その独特な生活様式や行動によって、各地で村落官吏や周辺社会と数々のトラブルを引き起こしながら、現在にいたっている。²⁾ そして、こうしたサミン運動の拡大した地域では、現在でも時折彼らの生活が新聞で報道されたりしている状態である。

この運動については過去に多くの歴史的研究が行われてきたが、それらの多くが東インド政庁の行政資料に基づくもので、それによってサミン運動拡大の経済的背景についての多くの議論がなされてきた。そうした資料の代表例は、Rembang 州副駐在官の Jasper によるサミン運動の経済的背景についての詳細な報告であり、歴史家は主にこの種の報告に依拠しつつ、オランダの倫理政策の結果として、Blora 県でのチーク林開発、労役義務などの金納化、あるいは1906年の村落自治体条例による村落の中核農民 (kerndorper, Blora 地域では gogol と呼ばれる) の地位への影響などが、サミン運動のこの地域での拡大の原因であるとしている。³⁾

2) サミン運動の歴史的展開その他の概略については、英語では Benda & Castles [1968]、日本語では白石 [1979] が最も包括的である。

3) こうした経済的側面は The [1967; 1968a; 1968b] が最も強調しており、土屋 [1971: 240-244]、白石 [1979: Chap. 2] らもその議論を受け入れている。一方 King は、貧困層

こうした経済的分析に比べ、サミン運動のもつ意味論の分野になると研究内容が非常に限定され、現在にいたるまで散漫な理解の仕方しかされていないという印象を受ける。サミン運動についての数々の分類法、例えば「原始共産制」[Tjipto 1918]、「ヒンドゥー期のジャワ思想との関係」[Benda & Castles 1968]、「千年王国運動」[Korver 1976]、「上座部仏教との類縁性」[Mulder 1983]、「インドネシア民族主義との系譜」[土屋 1971]などが示すように、サミン運動はその思想の具体的分析に比べて、数々のレッテルが先行した形になっており、人類学者らによる直接的なフィールド調査の欠如とも相まって、その思想的内容についてはいまだに多くの謎を含んでいるといえる。事実、現在にいたるまで存続するサミン社会についてのジャワ人一般の印象は、その日常的な行動や慣習の、際立った特異性であり、そうした特異性の根本にあるものが何であるかについての分析は、現在にいたるまで不足しているといえる。

こうした例の一つが、サミンの民の用いる特殊な言語法である。サミン運動が東インド政庁の注目を引くようになって以来、サミンの民が外部の者に向かって特殊な言葉づかいをするということはかなり認識されていた。Jasper は Surontiko Samin 以降のリーダーについて、彼らの言葉づかい、税の支払いへの態度などを基準として四つに分けており、⁴⁾ また民族主義者 Tjipto は、サミンの

も参加していることを指摘し、gogol を中心とした経済的説明を批判し、Blora 県の中心的運動と周辺地区のよりラディカルなそれを区別する必要、そしてより社会的な要因をみることを強調している [King 1973: 461-465]。

4) この内訳は、最も強硬で、納税・労役拒否、敬語を用いずサミン語で答える Engkrek 派、納税・労役は拒否するものの、こうした言葉づかいはしない Surokidin 派、税はイスラムでいうところの喜捨 (djekat pitrah) であり、労役義務を手助け (sambattan) と称して協力する

独特な会話法を部分的に記述しつつ、彼らが呪文を中心とした神秘的な考えをもち [Tjipto 1918: 33-38], 誰に対しても、くだけた普通のジャワ語 (ngoko) しか喋らず、こうした言葉の領域での闘争を行なっているのだと記している。さらに、サミン語とでもいべき彼らの特殊な語彙、会話の断片が記されているが、十分な分析を行なっているとはいえない状態である [ibid.: 38-45]。

こうしたサミンの言語学についての資料ないし分析は、1955年 Gadjah Mada 大学の社会政治学部による Blora 県周辺のサミン集落实態調査の結果、急速に豊かになったといえる [Soehernowo *et al.* 1955]。この報告書は、サミン的な会話法や多くの呪文が記載されている点で画期的であるが、一方それらのデータはほとんど分析がなされておらず、多くの呪文の意味や特殊な会話法の理由などについては考察がなされていない。

この調査の結果を使用してサミンの思想について解釈的な試みを行なったのが、白石の研究である [白石 1979]。ここでは、サミンの思想が人の領域と衣食の領域という二元論的発想に基づくことが示され、そうした観点からサミン的呪文の一部や、彼らの奇妙な会話が彼らのロジックから理解可能であることが示されている。しかし、一方でサミン運動を正義王運動⁵⁾ に結びつけたため、サミンの

言語そのものについての分析は全体のごく一部に止まり、彼らの言語法全体の解明からはほど遠い状態である。

当論文はこうした観点から、サミン集落における筆者自身のフィールド調査に基づいて、現在にいたるまで等閑視されていたサミンの言語体系を分析することを目的とする。そして、サミン運動に顕著な、特殊な言語法が、実はサミン思想の最も重要な基盤の一部をなすことが示される。

I 調査の背景

1. サミン運動の地理的分布

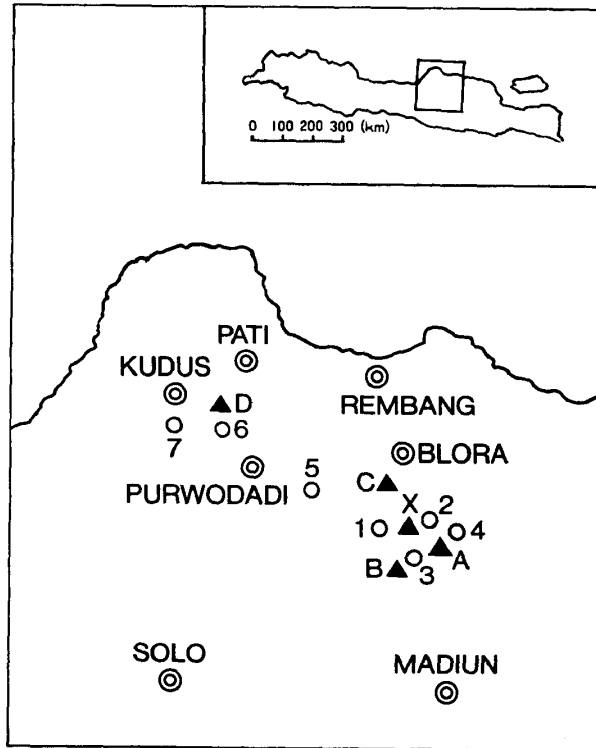
Jasper の報告によれば、1914年当時、サミン運動はその発祥地 Blora 県を中心として近隣の Madiun, Bojonegara, Ngawi, Rembang, Pati, Kudus といった諸県に広まっている (図および表1参照)。筆者が最初に調査したのは Kudus 県地方であるが、表1でも明らかなように、ここはサミン運動拡大の北限であり、特に南部の Undaan 地方にサミン集落があるとされていた。⁶⁾ こう

するにつれ、周辺の諸地域で部分的につけ加わった要因であろう [King 1973: 465]。一般にサミンの民に正義王 (ratu adil) に関して聞けば、決まって王とは自分の配偶者 (bojo) のことであり、正義とはアダム教の原則である「妬み、怨み、人への干渉、ものへの固執をするな……」(Aja srei-drengki dahwen-open...) という行動の方針 (pertikele kelakuan) を貫徹することとされる。また、こうした正義王と臣下の主従関係を示した「君臣婦一」(Manung-galing Kawula-Gusti) という有名な標語も、サミン的解釈に従えば、すでに配偶者と一体だ (wis nunggal karo bojoku) という夫婦関係の一体性を示すか、あるいは生命は子・孫と一体だ (uripe nunggal karo anak putune) というように生命の継続性を示す言葉とされるのが普通である。

6) Pati 県でも南部の、Blora 県にいたる Kapur 山脈のすぐ北側に属する地域に、散発的にこうした集落が存在し、Tambakrawa 郡では Karsiyah, 別名 Kowijiyo というリーダーが

↘ Wonokerto 派、そして呪文を唱えて静かにしている Surontiko Samin の旧来の弟子たちである [Jasper 1918: 6-7]。特に、Engkrek 派は、あらゆるこじつけ、言葉遊び、反問、隠語などを駆使して口答えをするとされている [loc. cit.]。

5) サミンと正義王運動の関係については別稿に譲るが、端的にはサミン運動内のこうした要因は、あくまで周辺の現象であって、サミンの中核的論理からは演繹されず、また筆者の調査した地域でも、ごく少数のサミンの民がこうした話を聞いているということ以外、正義王的問題はほとんど影響をもっていない。King からも指摘するように、Blora 県からサミン運動が拡大



1. Randublatung
 2. Kedungtuban
 3. Menden
 4. Cepu
 5. Ngaringan
 6. Sukolilo
 7. Undaan
 - X. Plosorejo—Kediren (Surontiko Samin)
 - A. Kemantren—Tanduran (Surokidin)
 - B. Mendenrejo—Bapangan
 - C. Klopodhuwur (Engkrek)
 - D. B村—Bb 区 (Turi) 調査地
- [数字は郡名 (○), 英文字は村一區名 (代表的リーダー名) (▲)]

図 サミン運動関係図

して歴史的資料に記録されている地域は何らかの形で目立つ騒動を引き起こしており、結果としてこうした地域ではサミン運動は現在

納税拒否の先頭に立って、1917年に逮捕されている [白石 1979: 107-108]。また Jasper の報告以降では、1928年の Juwana 郡の Genengmulyo 村で土地の等級づけ調査に関して、サミンの民が非暴力的抵抗を行なったという記録があり、村長を含めて12人が逮捕されている [同上論文: 115-118]。こうした諸地域の記述については、白石 [同上論文: 105-125] 参照。

表 1 1914年時のサミンの民統計

理事州	県	世帯数
Rembang	Blora	1,914
	Bojonegara	225
	Rembang	113
	Tuban	2
	小計	(2,254)
Madiun	Madiun	100
	Ngawi	174
	小計	(274)
Semarang	Grobogan	122
	Pati	228
	Kudus	25
	小計	(375)

出典 Jasper [1918] 統計

その痕跡を残していない。一方で、Kudus—Pati 地域で現在重要なサミン集落を形成しているのは、こうした東インド政庁の弾圧をある程度免れた地域であり、Pati 県南部の Sukolilo 郡とその西の Kudus 県 Undaan 郡の一部、Pati 市北部の一部などである。しかし、このことは、これらの地域と消え去ったサミン集落との間の教義上、あるいは全体的傾向上の差異を示しているというわけではなく、むしろ村や郡レベルでの彼らへの対応の仕方や、サミン集落がその地域での発展の初期段階において、行政面で脅威になるほどの勢力をもっていたか否か、といった面での差による点が多い。あとに述べるように、これらの現存するサミン集落は、アダム教の教義面に関しては、全面的に Blora 県の Surokidin (Surontiko Samin の娘婿で、初代リーダー逮捕、流刑後の最も重要なリーダーのひとり) に依拠しており、相互の交流 (saba-sinaba) も盛んで、内容面で他の地域との基本的差異は存在しない。なお、その他の地域にも、ごく少数のアダム教徒が散在しているが、すでに外部の影響を受けて、サミンの民としてのアイデンティティーを失い

つつある例もある。”

筆者の調査は、1984年の3月ごろから断続的にサミンの民との接触を開始し、同年9月以降 Pati 県 Sukolilo 郡を中心に集中的な調査が行われた。さらに、これと並行して Blora 県周辺の重要なサミン集落への訪問を行い、また各地にいる、サミンの民と何らかの形で関わり合いのあった人々、例えば村役人、教育文化庁役人や教師（サミンの民の学校拒否の問題に関連）、友人や旧サミンらにも、しばしばインタビューを試みている。それゆえ以後の記述はその多くの部分を Sukolilo 郡での調査に負うが、こうした記述は他地域のサミン集落でも基本的に妥当すると主張できよう。

2. B村のサミン運動史

筆者の最も集中的に調査したのは Sukolilo 郡B村およびその周辺のサミン集落であり、その Bb 区にすむ、およそ90世帯のサミン主義者たちである。

この地域のサミン運動史は、1870年ごろ誕生したと推定される Jamari⁸⁾ とその兄弟に発すると思われる。彼の父 Sukiman はアダム教の信奉者ではなく、Jamari の時代に Sukolilo 郡のある村に Blora 県から移住してきた農民によって、はじめてそうした教えの存在を知らされたらしい。Jamari のころにはサミン運動の中心地は前述した Surokidin のいる Blora 県 Kemantren 村 Tanduran 区に移っており、Jamari ほか4人はこの村に Surokidin をたずねて、アダム教の奥義を授かった。この時の彼の仲間と一緒に

に、B村でサミン流の納税・労役義務拒否といった行動をとるようになるが、この当時の村長は強硬派であり、Jamari らのこうした行動に対しては強圧的手段に訴え、Jamari らの牛や家などが没収 (beslah) されている。こうしたサミン集落と村役場の緊張関係は、次の世代（前村長の息子の Slamet と、Jamari の娘婿である Surosaiman）にいたってかなり改善した。熱心な国民党系の活動家であった前者は、サミン運動のもつ理念に関しある種の理解を示し、⁹⁾ 一方、インドネシア独立というできごとがサミンの民の間にも、「これからはジャワ人同士 (jawa padha jawa) の時代だから、仲良くしなければならない (kudu rukun)」という変化をもたらした。そのことは具体的には、Jamari 時代のような村落行政を完全に拒否する態度から、村内協働 (gotong royong) に協力したり、税金を援助 (sokongan) ということでなら払うといった態度変容にあらわれており、こうした双方の軟化による平和共存状態のなかでサミンの民の数はますます増加し、妨害や強制的転向の圧力もなく、現在のリーダーである Turi にいたっている。Turi もまた Surosaiman の娘婿であり、彼と同じD村出身である。Surosaiman は1980年に死亡し、また村長も前村長の息子にかわっている。現村長は、その父がもっていたサミンの民に対するある種の共感を明らかに欠いているようで、サミン的論理を単なるナンセンスなものと見做しているが、税その他がまがりなりにも支払われている以上、放任政策をとっている。

7) 例えば、Kudus 県 Jekulo 郡のS村の場合、かつてのサミン家系のかなりの部分が学校教育を受け、サミンの民としてのアイデンティティを失っており、サミン語も解さなくなっている。

8) 以下、すでに歴史的に知られている人名を除き、全て仮名を用いる。

9) 村役人の説明によると、彼は農業以外を拒否し、あくまで自らのもち分 (teke dhewe) を耕して独立に生活するサミンの民に、スカルノのいうマルハエンの像との親近性を感じたということである。

II サミンの言語(1)——その実例と一般の印象

いままで、サミンの民あるいはアダム教徒と呼んできた人々については、筆者の訪問した諸地域でもある程度有名であり、かなりの逸話が人々の間で語り継がれている。彼らはジャワ語でサミンの民(wong Samin)と呼ばれ、奇矯な言動で人々を惑わすという印象を、一般的にもたれている。そのなかで、最もしばしば話題に上るのが、その奇怪な言葉づかいであろう。筆者がサミンについての印象について最も初期に耳にしたのが、そのことである。ある santri (イスラムを学ぶ生徒)によると、サミン的喋り方とは例えばこうである。ある人がサミンの民に挨拶をして“Teka ndi?”(どちらから?)とたずねると“Teka buri!”(後ろから!、つまり後ろから前へ進んできたという意味である)といった答えを得る。こうした珍妙な応答は村役人とサミンの民の間では、しばしば次のような形をとる。

① Jenengmu sapa?

——お前の名は?

Jenengku lanang.

——名は男。

② Umurmu pira?

——歳はいくつだ?

Siji kanggo selawase.

——永遠に一つ。

③ Agamamu apa?

——宗教は何だ?

Agamaku gaman, gaman lanang.

——俺の宗教(Agamaku)は武器(gaman),
つまりペニス(gaman lanang)。

④ Sapimu pira?

——牛はいくつ(何頭)?

Siji. Sapi (Loro, lanang wedhok).

——一つ。牛(あるいは、二つ、雄と雌)。

⑤ Saiki kowe kudu mbayar pajeg karo Pemerintah.

——いまお前は政府に税金(pajeg)を払わねばならないぞ。

Aku wis duwe pajege dhewe, kok kudu tak bayar neh iku pie?

——俺はもう自分の税金(pajeg)をもっているのに払うとは何だ?

⑥ Nek ana pemilihan umum, kowe kudu melu nyoblos gambare Golkar.

——もし総選挙があったら、お前はゴルカル(政府与党)の絵を突き刺す(投票するの意)必要がある。

Aku wis duwe coblosanku dhewe, ora usah nyoblos liyane.

——俺はもう自分で突き刺すべきもの(coblosan)はもってるから、ほかのは突く必要はない(といって自分の妻を指差す)。¹⁰⁾

こうした謎のような会話は、しばしば単に人々を意図的に馬鹿にし、当惑させるためだけのものと考えられる傾向があり、それゆえサミンという言葉をも動詞化した nyamin という単語が、こうした人を馬鹿にした喋り方をするという意味で用いられたり、また子を叱る親が「お前の口の聞き方はまるでサミンのようだ!」(Omonganmu kaya wong

10) 簡単にこの会話の論理を説明すれば、①～③はサミン語による語彙の置きかえ、④は sapi という言葉は一つの言葉なので「一つ」(siji)あるいはどんな牛も雄雌いるので「二つ」(loro)ということ。数を聞く時は、「数は」(etunge)という単語を必ず加えなければならない。⑤は「税」(pajeg)という言葉が語呂合わせで「一貫した方針」(pathokan sing jejeg)という風に再定義されているので、そうした pajeg は人には払えないということになる。⑥は突き刺す(coblos)という言葉からアダム教徒がすぐさま性的な連想をし、それを女房と結びつけたので、人のは突く必要はないということになる。

samin!) といったりする場合もあるという。

歴史的にもこうしたサミン独特の言語法についての記載はあり、サミンの民の言語闘争 (woordenstrijd) に着目した Tjipto は、牛は何頭いる、とサミンの民が聞かれて、2頭 (kalih), と答えているが、実際はより多くの牛がおり、ただどこそこにはたくさんいるように見えるが、と問いかえされ、ああ数 (cacah) のこと、それなら多いです、と答えるといった例を挙げている [Tjipto 1918: 43-44]。だが、こうしたサミンの民のイメージは、しばしばそれとは正反対の印象によって補強され (あるいは反論され) たりする傾向があり、それは特に何らかの形でサミンの民と直接的関係を結んだことのある人 (村役人以外にも、教師とか個人的友人とか) の間に強い。すなわち、サミンの民とは正直であり決して嘘はつかず、全くの純朴な人々 (wong lugu temenan) であるという印象である。彼らは真面目な篤農であり、農業以外のことには目もくれず質素な生活を営んでいるということから、上記の奇怪な語法を駆使するサミンとは別の種類のサミンの民がいるのでは、という解釈がしばしば行われる。それが、いわゆる素朴なサミン (Samin lugu) と気に障るサミン (Samin sangkak) という分類法であろう。こうした考え方は筆者が面接した各地の村役人にしばしばみられる分類法であるが、サミンの民自体はこうした分類を否定しており、筆者もそうした2派の間に原則的な差異を認めない。むしろこうした考えは、サミンの民の言語法のもつ原則に対する無理解から生じた誤解であると主張できる。

III サミンの言語(2)——その構造と生成原則

1. サミン語彙の実例

ここでは、こうしたサミンの民についての

表2 特徴的なサミン語彙の例

ジャワ語	原義	サミン的語義
nabi	預言者	女
wali	聖人	男
agama	宗教	(男)性器
Adam	アダム	性、発話
umur	歳	生命
rukun	仲の良い	妻
ijol	交換する	売買する
salin sandang	衣をかえる	死ぬ
negara	国	体、家
etungan	数えるもの	金
anak	子供	母にとっての子
turun	子孫	父にとっての子
mondokan	宿泊所	家

諸印象を前提としつつ、複雑なサミン思想の中核の一つである彼らの言語形成について述べることにしよう。実際あらゆる外部の者を悩ますのは、あの不思議な言語の構成法であり、筆者の場合もその例外ではなかった。まず単語レベルで、彼らは一般的なジャワ語の用語に対して、自らの用語法を置きかえる。例えば jeneng という言葉は「名」という意味であるが、これが「性別」という意味とされ、「名」をあらわす単語として新たに pengaran (aran は同じく名、あるいは名づけるの意、pengaran はその名詞形) という言葉を使用することになる。このような例はほかにもいくつかあり、表2のとおりである。

こうした固定的用語法以外にも、さらに別の原則で形成される用語がある。例えば、かつて筆者がサミンの民に、「貴方はイスラムを信じるか」と問うた時に、「私はイスラム教徒でもあるし仏教徒でもある。なぜならイスラム (Islam) とは平安 (slamet) ということであり、仏教 (Buddha) とは裸で挿入する (mlebu wuda) ということであるゆえ、どちらもシクップの民にとっては大切だ」と

いう答えを得た。また別の例では、前述した Turi に「貴方の先生にあたる人は誰か」と問うたところが、「私の先生 (guru) は私の体にくっついていています。なぜなら guru の gu とは gunem (喋る) であり、ru は pangrungu (聞くこと) ですから、私の先生とは口と耳なのです」というわけである。さらに「貴方の牛 (sapi) はどこにいますか」という問いに、「俺の sapi は家にいる」という答えがあったが、これなどは sapi の pi は pilihan (選択) という意味であり、それゆえ女房ということの意味していた。

このようにして普通のジャワ人が日常的に構成する言語空間の秩序は、何らかの原則によって引き裂かれ、新しい、全く別種の解釈と秩序のなかに投げ込まれることになる。こうした新しい言語空間の秩序がどのように構成されるか理解できない者にとって、サミンの民が単に自らの防御のためにこうした奇怪な言語法を駆使すると信じ込んだとしても不思議はない。実際、長期的に彼らとつき合っ

11) サミンの民とはじめて会話する外部の者が感じる特徴の一つは、彼らの独特な無表情さである。ジャワの礼節の体系の一部として非常に重要な外面的な洗練 (halus), 常に微笑を浮かべ、物腰柔らかかといった理念とは逆に、サミンの民の多くは、しばしばぶっきらぼう、愛想のなさ、無頓着さを示す。しかし、そうした態度は、洗練の反対概念である粗雑、がさつさ (kasar) とも異なり、彼らは不親切でもなければ、怒りの感情を露骨に示すということも全くといっていいほどない。そうした感情 (特に、怒りや嫉妬など他者への攻撃的感情) はアダム教の教えでは徹底的に排除されるのであり、また彼らの多くの無口さは、間違っ

たことをいわないようにするための予防線の役割を果たす。こうして彼らの理想である素朴さ、朴訥さ (lugu) を実現しようとするのである。

2. サミン語の基本構造

さて、こうした言語法にはみたところ明らかにいくつかの段階があり、その段階を規定する諸原則が存在する。その段階を便宜上、次の五つに分けてみよう。それは、①中核語彙、②隠喩的重要用語、③地域的了解語、④個人解釈語、⑤その他である。

①まず第1に、中核語彙と筆者が命名した諸単語は、文字どおりアダム教の根本を示す語彙であると同時に、それをつかう者同士の間で、そのアイデンティティーの認識となるものである。例えば彼らが自己紹介する場合、まず, Kula niki wujudu wong, jeneng lanang, pengaranu Anu, mondokane teng Kudus——この私、姿は人、性 (jeneng) は男、名 (pengaran) は某、家 (mondokan) は Kudus, という表現方法を用いるが、こうした喋り方自体が自らをアダム教徒と認知していることの証左となるのである。それゆえ、彼らの間でこうした用語法については共通の了解が成立しており、その意味は明解であって解釈の余地はない。筆者自身もこの中核言語を理解することで、多くの初対面のサミンの民が何の抵抗もなく受け入れてくれたことにも、この中核語彙の重要性が明示されている。この段階の語彙形成の原則はあとで述べるように、言葉をその本来的機能に還元

するということである。上述した諸用語はこの範疇に入り、これはどの地域でも同様に、また一貫して用いられる。

②2番目の隠喩的重要用語とは、アダム教の教義全体にとって重要な意味合いをもつ、多義的な諸語彙のことである。これらはアダム教の奥義が示されている多くの呪文¹²⁾のなかにしばしば登場する語彙であり、それらは非常に重層的な意味をもっている。例えばサミンの呪文にしばしば登場する bumi という言葉があるが、これは普通の「大地」という意味のほか「セックス」、「妻」という解釈がなされ、jagad は「地球」以外に「身体」、yai「年長者」および putu「孫」という単語になると、前者が「太陽」、「目」、「思考」、後者が「決定」、「口」といった複雑な解釈をもたらすことになる。こうした諸単語はサミンの重要な呪文に登場するので、中核語彙と同様に、アダム教徒全員に認知され重要視されているが、公式化は多義的である。このレベルの諸単語を形成する原則は、しばしばジャワ語でいう kerata basa と呼ばれる民間語源論的 (folk etymological) 解釈によっている。

③第3の地域的了解語とは、ある一定地域で特殊に了解された諸単語のことである。例えば前述した guru (先生) という言葉が「口と耳」という本来の意義をもつというのは、あくまでB村周辺で定式化されていることであって、他県ではこうした解釈以外の仕方があったり、こうしたサミン的変形をもたらさずに普通に用いられていたりする。B村では gunung (山) は「口」のことであり、kali (川) は「ペニス」、kebo (水牛) は「女房」

のことであるとされている。こうした地域的了解は、何らかの形でその地域のリーダーが定式化したものを追従者たちがつかっているのである。

④上記の地域的了解語が形成されるのは、この個人解釈語を通じてである。一般にリーダーと称される人々との長時間にわたる対話のなかで非常に印象深いのは、彼らがもろもろの単語に新しい意味を付与する、その仕方である。例えば、筆者がかつて Turi に、貴方は弁も立つし、頭も良い (pinter), といったところ、彼は、pinter とは俺には相応しくない、なぜなら pinter とは pipine menter-menter (頬がふっくらとした) の意味であり、自分のような老人は頬がこけていて pinter ではない、といった反論に遇ったことがある。また彼に、イスラムでよく用いるアラビア語の bismillah (アッラーの名において) の意味がわかるか、と問うたところが、しばらく考えたあと、これは bisa milih bojo sing cocok (相応しい女房を選べる) ということが本義であり、それゆえアダム教の教えにも相応しい、と述べている。さらに、これは別の村での話であるが、ある3人のサミンの民と雑談している際に、彼らのひとりに、貴方は Golkar (政府与党、職能集団の意) という言葉を知っていますか、と問うたところ、誠実なその老女がこの言葉を何回も呟きながら考え、どうも答えがみつからないのをみてとると、もうひとりの人が叱るように、いいか、よく聞け、Golkar の gol とは nggolong (集まる、一緒になる) であり、kar とは karep (意思、意欲) であるから、これは karepe awor karo bojone (女房と交わるつもり) という意味である、と解説し、他のふたりはああなるほど、という顔で納得していたのは印象的であった。

⑤以上の説明からも明らかなように、第4番目の段階である、この個人的解釈を通じ

12) こうした諸呪文は、サミン思想のエッセンスとでもいうべき要素を含んでおり、彼らも呪文の形を通じて、その教えを学ぶ。後述する例もその一つであり、アダム教徒なら当然のごとく知っている内容である。

て、新しいサミンの言語秩序の発端が開かれることになるわけで、サミンの思考の外にある諸言語は彼らの言語秩序のなかに、なかば暴力的に導かれることになるが、もちろん詳細に観察すれば、こうした「外」の言葉をアダム教徒が全て秩序化のなかへ導入する労をとるわけではなく、彼らの意識的に非常に単純化された生活に何らかの形で介入しようとする新しい現象に対して、こうしたサミンの新解釈を施すことが主である。¹³⁾ また、全ての人がこうしたサミンの意味生成の場に立ち合うわけでもなく、こうした解釈を目まぐるしく行うことのできるのが、しばしばリーダーと見做される人々である。その点で、例えば Turi のような人は、どんな新語についても、何がしかの形で即座に解釈（しかもサミンの教えに適合する形で）を行う能力にたけており、これがある種のサミンの知的共同体を「外」の暴力から守る役割を果たしているといっていいただろう。

3. サミン語形成の原則

このようにして分析したサミンの言語秩序の諸段階は、一体どういう言語的編成原理によって構成されているのであろうか。ここには明らかに二つの方法が混在しているように思われる。

まず第1に、全体的に優勢な原則としてジャワ流の民間語源論的解釈術 (folk etymology, ジャワ語で *kerata basa*) がある。これはジャワ人一般が好んでつかう解釈の術の一つであるが、ある特定の単語を音節単位で恣意的に分割し、分割されたそれぞれの音節を意味をもつ別の単語に拡大して、新しい意

味を付与するというやり方である。ジャワである程度定式化されている例を挙げれば、*bapak* (父) とは *bab apa-apa pepak* (何についても一杯、つまり経験豊かで何でも知っているということを示す)、*tandur* (植える) は *nggone nata karo mundur* (退きながら調える、つまり田植えの時は後ろにあとずさりながら稲を植えていくの意)、さらに *prawan* (処女) は *yen pepara kudu wayah awan* (出掛ける時は昼間でないといけない、つまり夜では駄目という意) など枚挙に遑がない。こうしたやり方をみてもわかるように、*bapak* という単語ならまず *ba+pak* と分割され、前者が *bab*、後者が *pepak* と再構成されたうえで、全体として原義と意味が通じるように補充していくわけである。

一般にはこうした方法は、示されている言葉の本来の意義を開示するものとして用いられるわけで、よく知られた例は、ジャワの影絵芝居 (*wayang*) の登場人物のひとりであり、正法の白い血をもつとされるユディスティロが所持する、*Kalimosodo* という名の護符 (*jimat*) である。普通これは *kalimah sahadat* (イスラムの信仰告白) という本来の意味をもつと解釈されるが、これなど典型的な *kerata basa* である。また、日常的にもこうした解釈は行われることがあり、例えば、ある自伝的小説によると、日本軍政時代にさる著名なウラマが日本批判の演説をし、そのなかで、日本人には警戒しろ、なぜなら *Nippon* とは *nipu* (騙す) + *wong* (人) であり、それゆえ信用できないのだ、と強調したという [Zuhri 1977: 173]。

この点でいうと、一見奇矯にみえるサミンの言語構成もまた、こうした方法に負うところが多いことがわかる。*Bumi* (大地) の意味とは *bu+mi* であり、*bu*=*mlebu* (入れる、挿入する)、*mi*=*diemi-emi* (気をつける) と分解されて、ゆえに *bumi* の奥義は、

13) インドネシア語の新語、例えば *pancasila* (国家5原則) といった言葉にも、こうした解釈が行われている。また、特に Turi 老はこうした語呂合わせを即興で行うことが得意で、彼がよく耳にする言葉を、しばしばこのように解釈しなおしている。

表3 言語変形の実例

原 語	原 義	分 解	再 編 成	サミンの語義
agama	宗教	gama	gaman	武器(性器)
pajeg	税	pa+jeg	pathokan sing jejeg	一貫した方針
bumi	大地	bu+mi	lebone diemi-emi	ゆっくり挿入する
Islam	イスラム	slam	slamet	平安
Buddha	仏教	bu+da	mlebu wuda	裸で挿入する
gunung	山	gu	gunem	喋り
kali	川	li	pelu	男根

な姿をとっていなければ存在しないと見做され、実際はもちろん姿などこうした超自然的存在はもっていないわけであるから、ゆえにこれらは人間を示す記号でしかないというのがサミンの発想である。

「挿入する時は気をつけて」という、非常にかけ離れた意味をもつようになる。もちろん民間語源論はその本来の性質上全く恣意的なはずであり、guru (先生) という言葉を普通のジャワ的解釈に従って digugu lan ditiru (信じられ、真似される人) とするか、あるいは Turi 式に gunem lan pangrunu (喋ることと聞くこと、つまり口と耳であり、ゆえに自分の体にすでに guru は備わっている) と解釈するかは、本来は勝手のはずである。

隠喩的重要用語といった範囲で示した言語段階以下の諸段階が、基本的にこの民間語源論の原則に従っているということはかなり明確であるが、この際注意されなければならないのは、こうした言語秩序の転換方法は、サミンの民においては恣意的に行われるというのではなく、サミンのもつ基本的な世界観の構成にそってなされるということである。この点で強調すべきなのは、サミンの民がこの世界を厳密に二つの領域に峻別しているということで、これは人の領域 (wong) と衣食の領域 (sandang pangan) と呼ばれる二つの世界である。衣食の領域という言葉が意味するのは、人間以外の領域は基本的に人間にとっての衣食でしかないというサミンの興味深い認識の方法であり、驚くべきことに、このことのゆえに、アダム教徒の世界観のなかでは、伝統的なジャワの精霊崇拜の体系やアッラーといったものは、衣食=物として明確

しばしば彼らが一つの言葉を二重の意味合いでみるのは、こうした観点からである。例えば、牛 (sapi) という言葉一つにしても、衣食の牛 (sapine sandang pangan) と人の牛 (sapine wong) という奇妙な対比がよく行われ、「貴方のいう牛とはどちらの牛のことか」などとしばしば問いかえされたりもしたが、人の牛とは彼らが民間語源論を通じて人間の領域に解釈しなおしたもので、妻の意味だとされる。Sapi という、この一つの概念は、この二元論的世界観のなかで、動物である牛と、民間語源論的に解釈しなおされた「妻」、という二つの世界に股がって存在することになるわけで、こうした言語操作はあらゆる単語のレベルで可能である。ここにある考えは、人類学的社会にしばしば登場する大宇宙 (macro-cosmos) と小宇宙 (micro-cosmos) の相同性という発想であるが、サミンの場合はこのことがそれぞれ jagad gedhe と jagad cilik という言葉で示され、小宇宙としての人間の領域は基本的に衣食=物としての大宇宙の領域と同一の秩序を形成している。こうしたことを示すためにも、常にある種の定式化、即ち衣食=物の領域 (macro-cosmos) における山 (gunung) は人の領域 (micro-cosmos) における口 (gunem, 喋ること)、あるいは物=衣食の川 (kali) が人のペニス (pelu), といった対応関係が示されるのである。

さらに、こうした民間語源論的解釈の原則がたいてい性的ニュアンスを帯びる傾向があるのは、いままでの例から明らかであるが、これは上述した二元論的世界観に基づいている。世界が人の領域と衣食＝物の領域とに分かれている以上、そのそれぞれの分野で人間にとっての根本的原則が存在するが、それがサミンの言葉にいう、tatane wong sikep rabi, tata nggauta gebyah macul (人の掟は性の営み、仕事の掟は田畑の耕し) という意味深長な、しかもよく彼らの口に上るいい回しである。人間の領域においての根本原則は性の営みであり、これによって人は生産される。これが物の領域においては農耕作業であり、この二つの原則を一貫して守ることが彼らアダム教徒の使命であるという考えである。このことが多くの歴史家をしてサミン運動が農本主義であるとか性的乱婚だといった解釈を生んできたわけであるが、このように人における性、衣食＝物における農耕という立場によってサミンの民間語源論的解釈は規定され、ゆえにサミン運動史上有名なウルトラ・サミン主義者の Engkrek が、役人に、お前、税金 (pajeg) を払えといわれて、俺はペニス (paceg) なら家の女房に払っている、と答えたり、政党の絵を突き刺せ (投票)、といわれて、すぐ自分の突き刺すもの (coblosan) = 妻がいる、と試みてみたりする、こうした性的ニュアンスの横溢もまた、上述した世界の二元論的把握とそのなかでの性、農耕という二大原則に基づく言語転換なのである。

以上がアダム教徒によって用いられる言語的転換法則の第1番目とすれば、これとはやや異なったあり方であり、しばしば中核語彙を形成する原則として、彼らの世界観の直接的な表示、とりわけ根源への回帰ということが挙げられる。上記の民間語源論的解釈がサミンの言語秩序の第2段階以下ではよく用い

られるとしても、第1段階の中核言語はそれでは説明しにくい感があるのは否めない。なぜ dhuwit (金) という単語は etungan (数えるもの) となり、omah (家) は mondokan (宿泊所) といった奇妙な転換が行われるのであろうか。簡単にいえば、これらはその本来の機能をよりの確に表現しているという単語であり、それゆえより真実に近いというのがサミンのいい分である。普通は金のことは dhuwit というのに、なぜ etungan などというか、という問いには、そもそもこうしたもの (金銭) は何のためにあるといえ、このバナナは紙＝札2枚分、この米は紙＝4枚分という具合に、物を数えるためにあるのだという答えを得る。売買とはこうして紙に換算した結果に基づく交換であり、ゆえに紙幣はただ単に dluwang (紙) と呼ばれ、売買は ijol (交換する) と呼ばれるのであり、決して彼らは買う (tuku) とか売る (dol) とはいわず、あくまで紙をつかって交換したといういい回しになる。

Omah (家) が mondokan (宿泊所) となるのも、家の本来の機能が泊まる (mondok) ことにあることを思えば納得がいく。こうした機能の直接的表示に加え、彼らの世界観を明確に表示することによる言語変換の例としては、死ぬ (mati) ということ「衣をかえる」(salin sandang) といいかえる例が挙げられる。これは、人間の生命は永遠であり、死とは単に衣である肉体をかえることに過ぎないというサミンの民の信念に基づいている。これと同様、年齢 (umur) は、とたずねられて、永遠に一つ (siji kanggo selawase), と答えるのは、この umur という単語を生命 (urip) と同一視しているからで、生命は一つで永遠であるということなのである。¹⁴⁾

14) 前述した guru (教師) という言葉が解体され、口と耳とされる理由の一つは、やや特殊で、サミンの教えによれば、人間はみな絶対的

こうした例は彼らの明示的世界観からすぐに了解できる言語法なのであるが、より難解な例がいくつかある。例えば、なぜ *jeneng* (名) というジャワ語が性別をあらわすことになるのだろうか。まさにこのことは、人間そのものについてのサミンの思考の意義を知る一つの基盤となる問題である。ここで *jeneng* という言葉は人間にとって根源的な弁別、という意味で、恣意的な命名作用である *aran* と区別されて用いられている。人の通常の名はその生後決定されるものであり、それは意図的に名づけられる (*diarani*) から、人の名とは *pengaran* である。しかし、人間本来の「名」とはそれ以前に決定され、人がそれに従わなくてはならない何かであり、それはサミンの思想によれば、男と女という性の区別なのである。ここにも先ほど示した性の営みの根源的な重要性という意味が次第に明らかになってくると思われるが、このように物ごとの根源へとサミンなりに回帰していった末、立ちあらわれてくるのがこうした性的存在としての人間という性格である。その重要性は全く奇矯な *wali* (聖人) = 男、*nabi* (預言者) = 女という言葉のつかい方にも示される。イスラム的意味合いにおいて最も尊い意義をもつこうした言葉が、男、女という意味に還元され、ちょうどイスラムが彼らに与えるような尊厳が、この世の人間を構成する原理の一つである性の君臨に対して示されるのである。

↘に平等であり、教師—生徒といった権威関係を認めないことによる。それゆえ一般的に彼らは教える (*mulang*) といういい方を好まず、いう (*kandhani*) といういい方を好む。同様のことは *Gadjah Mada* 大学の報告にもあり、ここでは *Surontiko Samin* は *guru* と呼ばれるのを好まず、「わしは喋り、あんたも喋る」 (*aku guneman, ndiko guneman*) といういい方を好んでいたとされる [Soehernowo *et al.* 1955: *Bagian A. 1*]。

IV サミンの言語(3)——存在と言語

1. サミンの言語哲学

以上、われわれはサミンの民の錯綜した言葉の世界のなかに、ある種一貫した秩序形成原則を見出してきたわけであるが、ここでさらにわれわれが問わなければならないのはサミンの言語観である。なぜ上述したような方法を用いて、わざわざ言語秩序を変換し、奇妙な体系を作ろうとするのであろうか。

ここで、こうしたサミンの言語観を探るために、彼らの多くの呪文 (*unen-unen*) の一つで、人間と言葉の関係について語っている例をとり上げてみよう。

Dhek awang-awang uwung-uwung
 Alam durung dumadi
 Turun jagad thukul sangka bumi
 Sing bisa ngucap ujude aku iki
 Mulane yen Adam durung ngucap
 Ora ana apa-apa
 Sebab ora ana sing ngarani¹⁵⁾

かつて虚空の時
 宇宙はいまだ生成せず
 世界は大地より生まれた
 喋ることができるのは、姿はこの私
 ゆえに、もしアダムがいまだ喋らぬなら
 何も存在しない
 なぜなら名づける者がいないから

これは、内容については一部に多少の地域的差異があるにせよ、一般にサミンの民の間で広く認識され、その重要性が強調されている教えの一つである。ここに載せた訳はあくまで普通のジャワ語から訳したもので、サミ

15) この呪文は Soehernowo *et al.* [1955: *Bagian A. 23*] に記載がある。ただし B 村では一部内容が異なり、第3節から *Wong thukul sangka bumi, turunan neng jagad, jagad ucap, ucape Adam* となるが、その後は同じで内容的には大差はない。

ン語的な解釈にまではいたっていない。これを語義どおりみると、あたかも天地創造における始原的人間としてのアダムの誕生のように感じられるかもしれないが、そうした解釈はサミンの民がしばしば用いるイスラム的語彙のトリックに引っ掛かってしまうことになる。そもそも、ここに示されているいくつかの言葉は、みな非常に重要なサミン語の語彙にあたるものである。こうしたサミン語の例はまず、世界 (jagad) と大地 (bumi) である。すでに示したように、これらは重要語彙の範疇に入り、他の呪文でもよく用いられる。それによると、前者は *jiwa ragane manungsa* (人間の心身), *awak* (体) を意味し、後者は前述したとおり、*ibu* (母), *lebone diemi-emi* (ゆっくりと挿入すること) などを示す。そして、虚空 (*awang-awang uwung-uwung*) とはこうした *jagad* が生まれる前の *anane nembe bapak lan ibu* (ちょうど父と母しかいない状態) を示している。宇宙と訳した *alam* にはこれといったサミン語的解釈はないとすれば、これは人間が世界に誕生してくる姿を示していると解釈される。ここで興味深いことに、サミンは宇宙はいまだ存在しないという。さて、こうして宇宙がいまだ存在しないとすると、あるのは何か? (*Nek alam durung dumadi, sing ana ya apa?*), という問いが当然なされる、とアダム教徒はいう。そして、彼らによれば、その答えは人間 (*wong*) である。人間の誕生以前は宇宙は存在しないが、母 (*ibu=bumi*) を通じてわれわれの身体 (*jagad=awak*) は生まれ出てくる。その帰結は、この呪文の次の節が示すように、喋ることのできるのは、この姿をしたわれわれ人間だけであり、その結果もしアダムが喋らぬなら、「何も存在しない」、つまり世界を命名する者がいないから、というわけである。

2. 根源的言語性

この結論は、どの地域のアダム教徒にとっても同様の重要性をもっており、それは彼らがこの問題について極めて雄弁になることから示される。一貫しているのは、われわれの生きるこの世界は言語によって構成され、人 (Adam) がその対象世界を命名する限りにおいて「存在」するといえるという、サミンの民の信念である。物とは言葉であり、机を「机」という言葉を用いずに机自身について論ずることはできない。¹⁶⁾ この点では、われわれの生きる世界は本質的に言語的なものである。

この点で興味深いのは、先ほどの定式化である「発話なくして存在なし」という問題について、筆者が Turi 老にいろいろと反論を試みていた時のことである。もし「発話なくして存在なし」が正しいとするならば、われわれの目の前に存在する机は、もしわれわれが「机」という単語を発音しなければ消滅してしまうとでもいうのか、と問うたところ、Turi 老は筆者およびわれわれの話を聞いていた他のサミンの民に対して、少しの間沈黙するように命じたのである。こうして全員がシーンとして、しばらく時間をへてから、彼はおもむろに口を開くと、実際誰も口を開かなければ「机」というのはないだろう、これが証拠だ、というのである。では、心のなかで「机」という言葉を念じていたらどうか、という問いについては、あくまでそれが「発話」(*ucap*) されぬ限り「存在」しない、ということになってくる。こうなってくると、われわれのいるこの世界とは、サミン的思考

16) サミンの民に名づけられる前の物自体という発想を受け入れさせるのは困難である。また、ある人は、牛 (*sapi*), 鶏 (*pitik*), 犬 (*asu*) といったものがどうしてそう呼ばれるかについての起源譚を語り、決して恣意的ではないことを強調したが、他のサミンの民はこうした説明は知らなかった。

によれば、発話する存在としての人間が構成するコミュニケーションの連鎖によって成立しているのだということが明らかになってくるが、それゆえ、もし人間が存在しなければ世界も存在しない。Gadamer をもじって言えば、世界の根本はその言語性 (Sprachlichkeit) [Gadamer 1960] であり、言語を発するのが人間だけである以上、世界とは人間である。Sumbarang donya kuwi wong kabeh (全てこの世は人間だけ) とサミンの民が好んでいういい回しは、こうした彼らの徹底した人間中心主義を示している。

このことは、先ほど記した世界の二元的領域とは次のような関係にある。即ち、人の領域と衣食=物の領域とは便宜上二分されているが、実は同じであり (大宇宙と小宇宙の一致)、それは人間が発する言語によって全ての物が構成されているという彼らの信念にその基礎づけをもっている。世界の創造主は誰か? (Sing gawe donya iki sapa?), と問えば、イスラム教徒ならアッラーと答えるだろうが、サミンの民なら、それは人間である、なぜなら喋るのは人間だから (iku wong, sebab sing ngucap ya wong), と当然のごとく答えるのも、こうしたことに基づいている。このように、結局全ての領域が人間に還元され、人間の発話によって世界が構成されているというのを、極めて具体的な形で示しているのが、いままで論じてきたサミンの言語形成原則である。つまり、諸事象の言語的還元とは、大宇宙と小宇宙の相同性を前提とし、全ての事象を人間的領域に還元する際に言語の独特な再編成を行うということである。そして、こうした言語的再編成の根拠となるのが、上記した世界の根源的言語性という彼らの信念なのである。

こうした人間の言語性への自覚をその教義の中核とする以上、自らの世界を改変していくという努力は、端的には世界を構成する根

本要因と彼らが考える言語をかえていくことがその中心課題としてとり上げられるのは当然であろう。上述したように、こうした言語秩序の改変の方式としては、民間語源論的 (kerata basa) および一部はその物の本来の機能を示すと彼らが信じるところの言葉に還元していく方法があるわけであるが、結局こうした二つの手続きを通じて、彼らの意味世界は非常に閉ざされた性質をもつことになる。普通の言葉遊びが、原義とは全く意味の異なる世界を現出していく可能性をもち、¹⁷⁾ 同様に一般のジャワの民間語源論が、原語の自由な解体・再構築を通じて、語の「本来の意味」なるものを独創的に開示していくのに対して、サミンの民のそれは、外在の言語秩序を全て彼らのいう性と農耕の世界へと吸収してしまい、それによって世界はその外部をもたなくなるからである。イスラムの用語もインドネシア語の新しい用語も、こうした還元によってバラバラにされ、全ては従来のサミン的世界観を肯定するものとして再構成されてしまう以上、彼らの作り出す言語秩序を更新し、新しい世界観へと導くのは原理的に不可能であり、そこにはすでに本来の kerata basa がもっていた、全く新しい語義へといたる意味の跳躍が欠けているのである。

私見では、サミン運動は、彼らが wong lugu (素朴な人間) と呼ぶ、人間の本質的なあり方に回帰しようとする目的をもった運動である。こうした回帰のために性の重視や農耕への執着という観点も生まれるわけであるが、言語秩序もまた、こうした目的のために改変され、ちょうど農耕や性の選択がそうであるように、有無をいわせぬ形で、新しい、

17) 例えばフーコーがレーモン・ルーセルについて論じているのは、正しくこうした言葉遊びによって、一つの語の上に開示される、互いに何の関係もない観念の世界の出会いの場である [フーコー 1975]。

安定して閉ざされた秩序のなかに押し込まれるのである。一見全く奇矯で放埒にみえる彼らの言語構成が、実は外的世界を徹底的に単純化するための所作であるというのは、この意味においてである。

おわりに

サミンの民の、一般に奇矯とされる言語の構成は、単なる政治的な隠語や気紛れというのではなくて、一貫した思想に基づく言語世界の再構成である。ここで示した分析はそうした世界観のごく一部に過ぎないが、次の課題としては、当然のことながら、こうした特異な言語哲学をなり立たせる背景としての、ジャワ文化におけるこうした言語の問題との関連をみていく必要があるといえる。この点で示唆的なのは、ジャワ文化における言語観およびサミンの用いる民間語源論的解釈 (kerata basa) がジャワ文化にしめる位置である。

多くのジャワ研究家が指摘するように、ジャワ文化においては、敬語の発達したジャワ語を正確に喋るということは非常に重要性をもち、ゆえに言葉の問題はジャワ人にとって自覚的な課題の一つである。サミン運動が当時のジャワ人官僚にもたらした衝撃は、誰に対してもくだけた日常語 (ngoko) しか話さず、彼らがこうした言語秩序を全く破壊してしまったということである。¹⁸⁾ 人間の絶対平等主義を標榜するアダム教徒としては当然の

ことであるが、この問題は言語と政治秩序との関係でさらに論じられるべきであろう。

しかし、筆者にとってさらに興味深いのは、kerata basa に典型的に示されるジャワ的解釈学の公準のことである。一般にジャワ神秘主義 (kebatinan) といわれる諸流派のなかには、こうした kerata basa による独特の解釈学を発展させている流派が少なくない。歴史的にみても、コーランをあたかもヘルメスの文書として解釈することで、コーラン自身のもつ言語秩序から、全くジャワ化された新しい意味づけがなされるということがしばしば起こっており、その極端な例が *Gatoloco* や *Dermagandul* といった反イスラム文献に示される、イスラム用語の徹底的な性的解釈であろう。¹⁹⁾ こうした解釈学のもつ、外来の世界観に対する自己防衛機能と、サミンの言語学のそれは、明らかに通じる面がある。もちろん、このことはサミン運動が一般のジャワ神秘主義と同一であることは意味しない。サミンの民の徹底した二元論的世界観 (人と衣食) は神、精霊、といった超自然的存在を否定しており、瞑想 (tapa) によって神との関係を確立しようとする多くのジャワ神秘主義とは、その点で明確に対立す

18) ジャワ語の階層的な構造と民族主義運動の間には興味深い関係があるが、こうした敬語体系を否定し、同等の者同士が喋る時に用いられる ngoko のみを用いようとした意識的な運動に、イスラム同盟の指導者層によって始められた Djawa Dwipa 運動というのがあり、土屋はこれとサミンの運動の関係を示唆している [土屋 1971: 251 (cf. Tjipto [1918: 38])]. また、ジャワ語のこうした構造の歴史的生成、変容とその意義については土屋 [1983] 参照。

19) Anderson は、ジャワの伝統的イスラム寄宿塾 (pesantren) のイスラム教育において、しばしばこうした言葉遊び (pun) によってコーランのアラビア語がちょうどマントラのように解釈されたことを指摘し、こうした言葉遊びが異なる次元の認識を横断して、新しい言語—宗教的な因果性を作り出すことを強調している [Anderson 1966: 92-94]。また、例えば保守系イスラム知識人である Rasjidi は、こうした書のなかで、イスラムの用語が kerata basa によって全く新しい、性的な意味をもたせられていることに驚いている。例を挙げれば、sarengat (イスラムの教えの遵守の意) は yen sare wadine njengat (お眠りになる時はペニス勃起する) と解釈され、また Mekah (メッカ) は mekakah (性交時の体位をする) といった具合である [Rasjidi 1967: 62]。

る。²⁰⁾ また, *kerata basa* についても一般のジャワ人にとってはなぜ全てがこうも性や農耕といったものに還元されるのか不明なのであり, ここで述べた「通じる面」とは, かなり抽象度の高い, いわばメタレベルにおいてなのである。日常面では, あくまで彼らは「異常」であり, その論理の体系を明確に了解してはじめて, 一般のジャワ文化との共通点もおぼろげにみえてくるのである。

こうしたメタレベルでの共通性をもつジャワ的解釈学の方法を通じて, ジャワ文化への新たなアプローチが試みられるべきであろう。²¹⁾

参 考 文 献

- Anderson, Benedict R. O'G. 1966. The Language of Indonesian Politics. *Indonesia* 1 (April).
 ———. 1972. The Idea of Power in Javanese Culture. In *Culture and Politics in Indonesia*, edited by C. Holt. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Benda, H. J.; and Castles, L. 1968. The Samin Movement. *Bijdragen tot de Taal-, Land-, en Volkenkunde* Deel 125.
- フーコー, ミッシェル. 1975. 『レーモン・ルーセル』 豊崎光一 (訳). 東京: 法政大学出版局.
- 20) ジャワ神秘主義は, その内実において極めて多様であり, もろもろの要素の混合体であるために, 部分的にはアダム教の教えと類似した流派もあるが, ある原則をこれほど徹底的に追求した例は他にあまりみあたらないという点で, やはりサミン運動の非常な独自性は否定できない。
- 21) 本論文は, インドネシア石油教育交流財団 (INPEX) のご援助と, インドネシア学術科学院 (LIPI) の許可, および Gadjah Mada 大学農村地域研究所 (PPSPK) の後援を得て, 1983年3月から1985年3月の2年間, インドネシアのジャワ島で行われた現地調査の結果の一部である。サミン運動史の文献に関しお世話になった白石隆助教授, ジャワで筆者にサミンの存在を教示し, その調査の一部をみせてくれた Mashari 君, およびB村のサミン集落を案内してくれた Purnomo 氏に深く感謝の意をあらわす次第である。
- (原著 Foucault, Michel. 1963. *Laymond Rous-sel*.)
- Gadamer, Hans-Georg. 1960. *Wahrheit und Method*. Tübingen: J. C. B. Mohr.
- Geertz, Clifford. 1960. *Religion of Java*. Glencoe, Illinois: The Free Press.
- ギアツ, ヒルドレッド. 1980. 『ジャワの家族』 戸谷 修; 大鐘 武 (訳). 東京: みすず書房. (原著 Geertz, Hildred. 1961. *The Javanese Family: A Study of Kinship and Socialization*. Glencoe, Illinois: The Free Press.)
- Hasan, Anwar. 1978. The Upbringing of Samin Children in Margomulyo Village, East Java. *Prisma* (English Edition) 15. Jakarta: LP3ES.
- Jasper, J. E. 1918. *Verslag Betreffende het Onderzoek in Zake de Saminbeweging Ingesteld Ingevolge het Gouvernements Besluit van 1 Juni, 1917 No. 20*. Batavia.
- Jay, Robert. 1969. *The Javanese Villagers: Social Relations in Rural Modjokuto*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- King, Victor. 1973. Some Observations on the Samin Movement of North-Central Java: Suggestions for the Theoretical Analysis of the Dynamics of Rural Unrest. *Bijdragen tot de Taal-, Land-, en Volkenkunde* Deel 129.
- Korver, A. Pieter. 1976. The Samin Movement and Millenarism. *Bijdragen tot de Taal-, Land-, en Volkenkunde* Deel 132.
- Mulder, Niels. 1978. *Mysticism and Everyday Life in Contemporary Java*. Singapore: Singapore University Press.
- . 1983. *Java-Thailand: A Comparative Perspective*. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.
- Rasjidi, H. M. 1967. *Islam dan Kebatinan*. Jakarta: Penerbit Bulan Bintang.
- Sartono, Kartodirdjo. 1973. *Protest Movements in Rural Java*. Kuala Lumpur; Singapore; Jakarta: Oxford University Press.
- 関本照夫. 1982. 「サウイト事件の文化論的考察」『千年王国民衆運動の研究』 鈴木中正 (編) 所収. 東京: 東京大学出版会.
- 白石 隆. 1979. 「サミニズムとラヤット・ラディカリズム」『東洋文化研究所紀要』 77.
- Soehernowo et al. 1955. *Research Golongan Masyarakat Samin*. Yogyakarta. (Mimeographed)
- The, Shiaw Hiap. 1967. The Samin and Samat Movements in Java: Two Examples of Peasant Resistance. *Revue du Sud-est Asiatique* 2.
- . 1968a. The Samin and Samat Movements in Java: Two Examples of Peasant Resistance.

- Revue du Sud-est Asiatique et de l'Extrême Orient* 1.
- . 1968b. The Samin Movement in Java: Complementary Remarks. *Revue du Sud-est Asiatique et de l'Extrême Orient* 2.
- Tjipto, Mangoenkoesoemo. 1918. *Het Saminisme: Rapport Uitgebracht aan de Vereeniging "Insulande"*. Semarang.
- 土屋健治. 1971. 「サミン運動とインドネシア民族主義」『東南アジア研究』9(2).
- . 1983. 「ジョクジャカルタ——中部ジャワにおけるくみやこ>の成立と展開」『東南アジア研究』21(1).
- Zuhri, K. H. Saifuddin. 1977. *Guruku: Orang-orang dari Pesantren*. Bandung: PT Alma'arif.